

## 即時リリース用

### ライオンズクラブ国際平和作文コンテストにおいて、インド・ケーララ州在住の中学2年生、シュレヤ・ゾイさんが大賞を受賞

(米国イリノイ州オークブルック発) - インド・ケーララ州在住のシュレヤ・ゾイさん（13歳）は、世界における平和について、独自のアイデアを持っています。シュレヤさんは、自らの力強い作文を通じて、そのアイデアに命を吹き込み、ライオンズクラブ国際平和作文コンテストで大賞を獲得しました。

国際会長 ダグラス X. アレキサンダーは次のように話します。「私たちは皆つながっています。若者の視点からの素晴らしい意見から、互いの話に耳を傾ける時間を持つことで平和と国際理解が得られることを、世界がより早く理解できる場合もあります。平和作文コンテストは、もっと思いやりにあふれる平和な世界を実現する方法について力強い考えを持つ、シュレヤのような素晴らしい若者の声を取り上げるものです」。

国際平和作文コンテストは、目の不自由な青少年に平和への思いを表現する機会を与えるもので、世界中のライオンズクラブの主力事業となっています。ライオンズは地元为学校や家族と協力して、このコンテストへの参加に関心があり、恩恵を受ける可能性のある青少年を探し出しています。

「私は視覚に障害がありますが、大人になったら医者になりたいです」とシュレヤさんは話します。「私のような視覚障がい者に対しては、痛みにも目を向けるのではなく、進歩に目を向けてほしいです。難しいかもしれませんが、不可能ではありません」。

この大賞受賞作文「私たちはみんなつながっている」は、独創性、構成力の高さ、そして今年のテーマ「私たちはみんなつながっている」を見事に描写したその表現力によって選ばれました。マナシー・アグリシティ・ライオンズクラブが、地元でのコンテストをスポンサーし、この8年生に世界的なイベントへの参加、そして彼女の平和への言葉を世界に共有する機会を提供しました。

マナシー・アグリシティ・ライオンズクラブのP・V・スレンドラナド会長は次のように語ります。「国と国との距離が日々狭まる中、ヨーロッパとそれ以外の世界の国々との間の紛争に皆が心を痛めている現在、平和作文コンテストを開催するという考えは、非常に有意義です。私たちはシュレヤの偉業の一端を担うことができ、天にも昇る気持ちです。シュレヤとその家族も含めて皆が、この歴史的な偉業を喜んでいますが、彼女の考えは刺激的で、未来を形作るのは若者だという、その世界観は心に響きます」。

シュレヤは作文の中で、世界は一つの家族であるという考えを示しました。民族が違って、文化が違って、宗教が違って、私たちは皆、愛と幸福に値する人間なのです。続いてシュレヤは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックを取り上げ、世界的な危機の中で、人々は大きな必要性に迫られ、互いに助け合うことができたと言っています。最後に彼女は、私たちはパンデミックから学んだ教訓を忘れずに、真の意味でつながり合い、互いに支え合っていることを認識する必要があると主張します。

シュレヤは次のように話します。「平和作文は重要なものです。人間は集団でこそ生き残ることができるということを他の人が理解するのに役立つかもしれないからです。私たちは互いにつながっていて、他人の優しさに頼りながら生きているのです。最近のパンデミックから、誰も独りきりでは生きていけないという教訓を私たちは得ました」。

コンテスト入賞者であるシュレヤさんは表彰式に招待され、賞金の現金 5,000 米ドルと記念品が贈られる予定です。ライオンズクラブ国際協会のウェブサイト ([lionsclubs.org/peace-essay](https://lionsclubs.org/peace-essay)) から、彼女の作文やコンテストの詳細を閲覧できます。

ライオンズクラブ国際協会は、世界 200 を超える国と地域の 140 万人以上の男女が集まる世界最大の奉仕クラブ組織です。ライオンズは、世界中の青少年の心に平和と国際理解の精神を育むために平和作文コンテストを行うようになりました。

---

### 私たちはみんなつながっている シュレヤ・ゾイさんの平和作文コンテスト大賞受賞作品

私を含めて誰もが、他の誰かに身体を抱きしめられ、話を聞いてもらい、気持ちを受け止めてもらい、支えてもらっているときの心地よさについては覚えがあるでしょう。このような人と人との温かいつながりは総じて、身体と心の健康を維持するためにとっても大切なものです。

サンスクリット語に「ヴァスダイヴァ・クトウンビカム」という言葉があり、大抵の場合「世界はひとつの家族である」という意味で使われます。世界中の人々は間違いなく、生きていく中で次に挙げる同じものを得ようと皆が努めています。それは幸福、平和、安全、食料や住まいなどの資源、そして希望に満ちた未来です。

真の意味での人間のアイデンティティは、特定の民族や文化に属しているかどうかではありません。そうです、人は皆、さまざまな道を追い求め異なる宗教に帰

依するかもしれませんが、従うべき道や教えは変える場合もあります。そのような道や宗教などは仮の目的地にすぎず、人の魂は、そうしたもののすべての上に置かれるべきものです。そして魂の本質は、人を愛し、人に愛されることです。幸せは人と人との関係の中にあり、深い愛情に満ちた関係にまさる幸せはありません。かけがえのない人間関係とは、ある一つの対象、至高の存在に心からの愛を捧げることです。これこそ永遠に至る魂の道筋です。

魂についてのこのような確かな認識を持つことで、私たちはおのずと、人種、性別、種族に関係なく、すべての他者を尊重するようになります。誰もがこれを実行すれば、社会的な活動において、誰に対しても道徳的で平和的に振る舞えます。すべての人の尊厳を認めて尊重し、一瞬でもほんの一部でも神が宿っていると見ること、私たちは本当の幸福を感じることができます。この地球に生きる人ひとりの生涯は宇宙の営みに比べればほんのわずかな時間であり、その短い時間を皆で共有しているのです。

破壊的な戦争を何千回も繰り返した挙句に人類はようやく、平和の大切さを認識しました。戦争、環境汚染、天災などの災禍についても、あらゆる面で同様のことが言えます。

平和と調和が保たれていれば、物事は滞りなく進行していくものです。加えて、破壊的な活動を好まない多くの人にとっては、このことが救いになります。

ところで私たちは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、別の角度からの深い教訓を得たと思います。それは、私たち人類は互いにつながっており、お互いに支え合っているということの再確認です。私たちが自分たちなりの正しい対策を行い、手を洗い、マスクをつけ、適切な社会的距離を保ちながら生活すれば、COVID-19 から身を守れる可能性があるということです。

このような判断や選択ができるようにならない限り、学校は閉鎖を解けず、職場は以前のように機能せず、医療制度への負担はかかり続け、結果として社会は本質的に立ち行かなくなります。

そして、このコロナ禍で得たもう一つの教訓は、一人の力だけでは立ち向かえないということです。大勢で心をつなげて力を合わせ、熟慮の上で対策を講じなければなりません。その連帯も一国内にとどまらず、国をまたいだ協力が必要です。私たちは協力し合い、時には個人の選択よりも公共の福祉を優先しなければなりません。

COVID-19 や将来のパンデミックに対して、人類が一丸となり対応策を講じたいと願うとき、人は皆確かに一つにつながっていて、互いに支え合っていることを思い知らされます。

結論をまとめると、私たち人間は同じ巣にいる鳥です。ただし皮膚の色が違い、異なる言葉話し、ある宗教を信奉し、異なる文化に属している、それでも皆、地球という同じ星で生きています。同じ地球に生まれ、同じ空の下に暮らし、同じ星を眺め、同じ空気を吸っている私たち人間は学びを続け、幸せに向かってともに進化していかなければなりません。人は独り暮らしもできますが、集団に加わっていなければ生き残れないからです。「そう、私たちはみんなつながっているのです」